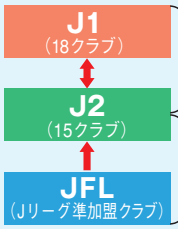
現在の入れ替えの仕組み ※2008年現在



【J1、J2の入れ替え】
2クラブが自動昇降格。
1クラブが入れ替え戦により昇降格。

【J2への昇格】
入会条件を満たした準加盟クラブが昇格

※JFL＝日本フットボールリーグ

J2リーグの将来像を決定

Jリーグは、Jリーグの将来像を、以下の通り定めることに決定した。これは、財団法人 日本サッカー協会（JFA）によって設置された「Jリーグ将来構想委員会」によって提案され、2008年度第3回Jリーグ理事会（6月）および同第4回JFA理事会（7月）にて承認された。

【J2リーグの将来像】

1. J2リーグのクラブ数を、22まで増やす。
- a J2が19クラブになった翌シーズンに入会できるクラブ数は、22から逆算して定める。
  ※この場合もJFL4位以内など、一定の成績条件を設ける。

2. J2リーグが22クラブになったシーズンから、J2とJFLの入れ替え制度を導入する。
- a JFLからJ2へ最大3クラブが昇格（入会）し、同数のクラブがJ2からJFLへ降格（退会）する。
  入れ替え戦またはプレーオフなどは実施しない。
- b JFL所属クラブは、Jリーグが別に定める入会条件を満たしない場合、JFL順位にかかわらず昇格（入会）できない。
- c J2からJFLへ降格したクラブは、Jリーグ会員資格を失う。

3. J2リーグが18クラブになったシーズンから、J1とJ2の入れ替え戦を廃し、リーグ戦成績をもって昇降格要件とする。
- a J2からJ1へ最大3クラブが昇格し、同数のクラブがJ1からJ2へ降格する。
- b J2クラブは、リーグが別に定めるJ1昇格基準を満足しない場合、J2順位にかかわらず昇格できない。

4. 全国で100以上のJリーグを目指しうるクラブが活動することを、将来目標とする。
- a Jリーグを目指しうるクラブとは、活動拠点（クラブハウスとグラウンド）を持ち、自立して法人格を持ち、スポーツを通じて地域に貢献するクラブ。
- b 上記のクラブが成立するために、全国のリーグ戦が整備される必要がある。

付記：JFAが並行して検討する事項
1. JFLの活性化、およびJ2から降格したクラブへの支援施策。
2. 地域リーグの構造検討を含む活性化。
3. JFL以下のリーグ構造の検討および決定プロセス。

J1・J2入れ替え戦は廃止へ（昨季の広島vs京都）

2008 Jリーグ ヤマザキナビスコカップ

大会

準決勝のカードが大分vs名古屋、G大阪vs清水に

大会史上初、関東のチームが準決勝に進出を果たせず

2008Jリーグヤマザキナビスコカップは7月2日、8月6日にホーム＆アウェイによる準々決勝が行われ、大分トリニータ、名古屋グランパス、ガンバ大阪、清水エスパルスが準決勝進出を決めた。準々決勝で敗退したのは、いずれも関東のチーム。1992年にスタートした同カップ史上、関東のチームが準決勝に進めなかったのは今回が初めて。

大分はFC東京とのアウェイゲームに2―1と勝利して優位に立つと、ホームの第2戦を1―1で引き分け、1勝1分の成績で勝ち抜き。名古屋はジェフユナイテッド千葉との2戦を1―0と連勝した。ガンバ大阪は横浜 F・マリノスにホームで1―0、アウェイで1―2と1勝1敗、2試合合計スコアも2―2となったが、アウェイの得点数で勝り2連覇へ前進。清水は鹿島アントラーズとのアウェイゲームを0―0で引き分けた後、ホームで2―1と勝ち、1勝1分で4強入りを果たした。

【決勝トーナメント 準決勝 組み合わせ】

【決勝】11月1日（土）／国立

【準決勝】
第1戦 9月3日（水）19:00／瑞穂陸
第2戦 9月7日（日）18:00／九石ド
- 大分
- 名古屋

【準決勝】
第1戦 9月3日（水）19:00／日本平
第2戦 9月7日（日）19:00／万博
- G大阪
- 清水

※表の右側のチームが第1戦のホームチーム、左側のチームが第2戦のホームチームとなる

横浜FMvsG大阪の準々決勝第2戦。G大阪の二川（右から2人目）が貴重な得点

大会

スルガ銀行チャンピオンシップ OSAKA 2008開催

G大阪がアルセナルFCに惜敗。今季2冠目はならず

2007Jリーグヤマザキナビスコカップ優勝のガンバ大阪と、南米のクラブカップ戦の一つであるコパ・スダメリカーナ2007を制したアルセナルFC（アルゼンチン）の対戦となったスルガ銀行チャンピオンシップ OSAKA 2008が、7月30日に大阪長居スタジアムで行われた。気温31度という暑さの中での試合は87分、アルセナルFCがCKのチャンスを生かして均衡を破り、1―0のスコアのまま逃げ切った。

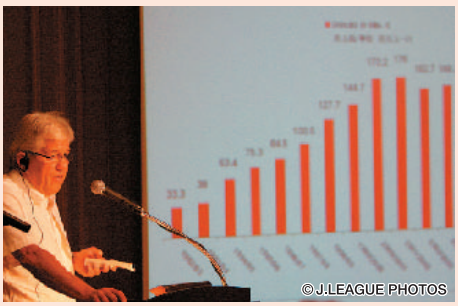
G大阪は、今年2月にハワイで開催されたパンパシフィックチャンピオンシップ2008に続く、今季2冠目の獲得はならなかったが、西野朗監督は「（世界）基準がこのあたりだと感じ、国内の試合に生かしたい。こうした厳しい試合ができるように、チーム力を上げていきたい」と語り、貴重な国際経験で得たものは大きかったようだ。

経営 名門クラブのGMを招き、Jリーグ GM講座 セッション3を実施

ウリ ヘーネス氏（バイエルン ミュンヘンGM）の講義から、GM像のイメージに触れる

この6月に始まった「2008Ｊリーグ GM講座」のセッション3が、7月30～31日に開催された。「チーム強化・GM論」がテーマとなった今回は、GMとして求められるコンペテンシー（高い成果を発揮する人物が有する行動性）に関する考察を深めることを目的に講義が行われた。2日目には、浦和レッズとのプレシーズンマッチに来日したドイツの名門クラブ、バイエルン ミュンヘンのGMを務めるウリ ヘーネス氏（56歳）による講義が行われ、16名の受講者が熱心に耳を傾けた。

ヘーネスGMは20代後半、負傷によって西ドイツ代表やバイエルン ミュンヘンで活躍した選手生活にピリオドを打ち、クラブの経営にかかわる現職の道を歩むことになった。以来、約30年間、現在では取締役副会長の肩書きを持ち、ドイツ経済界でも有数の手腕を持つマネージャーとなり、その才覚によってクラブの地位、規模を大きく引き上げた。



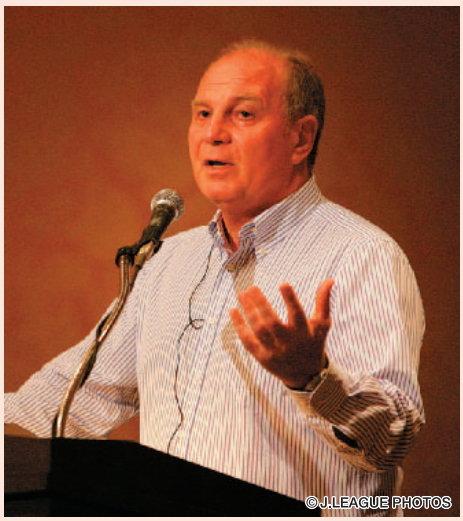
講義に先立ち、クラブの概要を解説するヘーゲレ国際部長

スポンサー収入や放映権収入など、金額の規模など単純にＪクラブとは比較できないが、自身がマーチャンダイジングの概念などなかった時代から「たたき上げてきた」と語るヘーネスGMの講義には、興味深い話も多かった。

例えば、GMに必要とされる能力の一つとして、「スポーツと経済をリンクさせて説明できること」について言及。選手獲得に関してクラブ上層部を説得したり、スポンサーシップを引き出す企業トップとの交渉など、GMの専門能力を示すことが大切だという。また、GMに必要な素養については、「意志の強さ、人格、実行力」を挙げた。

今季はＵＥＦＡチャンピオンズリーグに再挑戦するバイエルン ミュンヘン。「この勢いに乗り、ドイツ全体が活気を帯びることができれば」。社会的にも国内で重要な役割を担うビッグクラブのGMらしい、責任の大きさを感じさせるコメントも残した。

選手として卓越した経歴を持つGMが、オンザピッチだけでなく、オフザピッチである経済の側面についてよどみなく語り、GMに求められる姿勢について明確な考えを熱く語るその姿は、将来のＪクラブの経営を背負うであろう受講者にとって、一つのモデルとして良い刺激となった。



ＦＩＦＡワールドカップ優勝（1974年西ドイツ大会）など、選手としても輝かしい経歴を持つヘーネスGM

育成 2008年度 第2回Jリーグ・アカデミー コーチングワークショップ

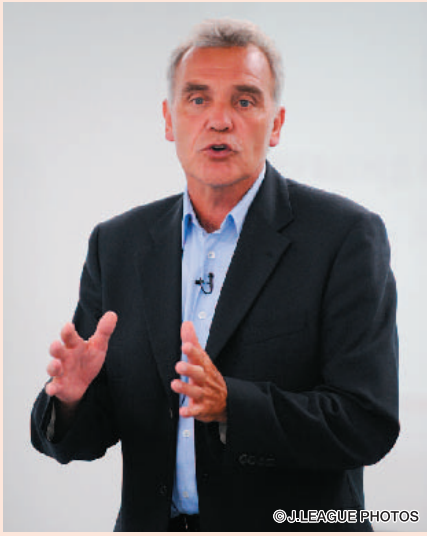
講師にドイツサッカー協会コーチングライセンス研修責任者のベルント シュトゥバー氏

Ｊクラブの育成年代の指導者、育成責任者を対象とした「2008年度 第2回Ｊリーグ・アカデミーコーチングワークショップ」が、8月6日に開催された。今回の講師を務めたのは、ドイツサッカー協会（ＤＦＢ）コーチングライセンス研修責任者のベルント シュトゥバー氏（55歳）。講義の中で、今年6月に開かれた欧州選手権のEURO 2008™を総括し、ドイツにおける育成年代の代表チームの取り組みについて解説した。

40名近いＪクラブの育成担当者がドイツの育成システムについて学んだ

EURO 2008™の分析は、トップの代表チームの問題と考えられがちだが、「育成年代の指導者にとって大切」とシュトゥバー氏。つまり、「これからのサッカーの傾向を見極めるために重要」で、育成年代にはそれを見据えた指導が必要という。

ＤＦＢによるタレントの育成については、全国350カ所の育成拠点が基礎となり、次第に優秀な選手が選抜されてトップの代表チームに至るシステムが紹介された。しかし、育成のベースはあくまで「オーガナイズされたサッカーに触れるクラブ」と言い、特にU-12、U-13では、将来に生きる運動経験として「さまざまなスポーツに親しむこと」も重要視する。シュトゥバー氏はまた、ＤＦＢの哲学として試合に重きを置いた指導の必要性も強調した。彼が挙げたのは「ゴール、攻撃方向、相手の存在」という三つの要素。常に試合の形式を採用することによって、「サッカーの本質を理解することができる」と言う。ドイツでは、たぐいまれな技術を持つ選手は生まれないだろうとの認識に立ち、最後の1秒まで勝とうという勝者のメンタリティーによって補おうとしている。「ゲルマン魂」とも呼ばれる不屈の精神を、ドイツ人のストロングポイントと考え、育成年代から試合を数多く経験させることによって養うというのは興味深い。



「独自の育成システムを」とシュトゥバー氏

シュトゥバー氏は「学ぶことは大切だが、これらはドイツに合ったシステムであり、各国それぞれのストロングポイントを生かし、独自の哲学による育成システムをつくってほしい」と、講義を締めくくった。

Report
リポート

スポーツでつくる幸せな国
「Jリーグ百年構想」へのアプローチ

11 名古屋グランパス

軌道に乗り始めた新しい路線。地道な活動継続への熱意

「グランパス勝ったね」で特典

名古屋グランパスが地域密着の活動に本格的に取り組んだのは昨年から。「これまでは、どうしても目先の事業にとらわれてしまった。原点に返ったということです」と川北登志雄広報部長は説明した。

川北 広報部長

当初は専任の担当者がいなかったが、今年は新たに1人増員して、事業部運営・ホームタウングループとして活動を強化。2007年には、愛知県内の12の商店街がサポートタウンとして活動していたが、今季はさらに3つ増え、15商店街となった。

サポートタウンでは、応援ツアーや、選手のトークショーなどの企画に加え、グランパスが試合で勝ったときに、さまざまな特典をつける「勝ち店（かちてん）」を、ファン開拓の足掛かりの一つにしている。「グランパス勝ったね」と言えば、1割引きのインテリアショップ、生ビール1杯サービスの中華料理店など「勝ち店」は60店舗を超える。また七夕祭りで有名な一宮市、安城市では、「ミス七夕」が試合会場で、プレゼンテーターなどを務め盛り上げることもある。

グランパスはJリーグ発足当初、常に観客動員数でリーグ上位に入る人気チームだった。ブームが下火になり始めた1995年ごろからチーム成績が向上し、ストイコビッチというスーパースターの存在もあり、不況知らずだった。

サポートタウンに掲げられているのぼり　©名古屋グランパス

今池商店街で行われたトークショー。竹内、小川の両選手が参加　©名古屋グランパス

しかし徐々に下降線をたどり、ストイコビッチ引退後の2002年に、初めてリーグの平均入場者数を下回った。他のクラブに比べ、下降線が遅れてやってきただけに、対策を講じるのも遅れてしまった感がある。「主力選手の露出をしたり、プロモーション活動を積極的に展開したこともあるが、なかなか効果が出ない。やはり、地道な活動でファンを掘り起こしていくしかない」と川北部長は言う。

ホームタウンの名古屋市には、プロチームとして70年以上の歴史を持つ中日ドラゴンズがある。根強い人気を誇るだけに、ファン開拓は、簡単ではない。当初は商店街に出向いても、なかなか相手にしてもらえなかったが、足繁く通って、街の活性化にもつながる共同事業として理解を得られるようになった。

日常会話に出てくるような存在に

チームの強さ、スター選手だけに頼らない新しい路線は、軌道に乗り始めた。入場者数は回復傾向が見え始めている。

「人気のバロメーターは、条件が悪いときに、どれだけのお客さんが来てくれるかと意識しています。そのときに、本当の人気が表れる」と話すのは岩月宏樹事業部副部長。5月10日のJ1リーグ戦、神戸戦を例に挙げた。平日のナイターで雨の悪条件。約8,000人の観客に「こういうときでも、1万人以上集められるようになれば」と、営業努力を続ける。

地域密着活動では、行政とのタイアップにも力を入れる。8月から11月にかけた4試合では、名古屋市内の小中学生を各2,500人、計1万人を招待。刈谷市の小中学生は2試合で各1,000人。

中部地区の企業による後援会も、地域密着型のクラブ発展に協力を惜しまない。当初は、後援会会費の使途の多くを開幕前の選手激励会に注ぎ込んでいたが、応援してくれるファンのために使う方針に変えた。例えば格安の応援バスツアー。愛知、岐阜、三重の東海三県で、30人以上のチケットを購入した小学生チームには、無料の送迎バスサービスがつく。1試合で2、3台とはいえ、予想を上回る申し込みが殺到している。往復の電車賃が入場料を上回る地域から喜んでもらえるサービスができるのも、後援会費でバスを用意するからだ。

中日ドラゴンズとのタイアップは、マスコットの友情出演などがあるが、基本的には、独自路線を進んでいる。それでも地域に根差したプロチームのイメージは参考になる。

「この地域の人たちは、ドラゴンズ勝ったね、負けたねと、あいさつ代わりにしている。わたしたちグランパスも、日常会話に出てくるような存在になりたいと思っている」と川北部長。岩月副部長は「70年、80年たったときに、どんなクラブにできるかを考えながら、一つ一つ、積み重ねていくしかない」と地道な活動を続けていく熱意を見せた。

（中日スポーツ　木本 邦彦）

「Ｊリーグ百年構想」の理念の実現に向けたＪクラブの多彩な取り組みにスポットを当てるこのシリーズも6回目を迎え、全33クラブの3分の1以上を紹介したことになる。今回、リポートするのは名古屋グランパスと湘南ベルマーレ。現在、それぞれに地域に密着した活動を精力的に展開している。名古屋は地道にファンを掘り起こし、湘南は総合型スポーツクラブとしての発展を目指すが、「クラブを本当に支えてくれる人々」を大切にする姿勢に変わりはない。

スポーツで、もっと、幸せな国へ。
J.LEAGUE 百年構想

12 湘南ベルマーレ

クラブ存続の危機をきっかけに総合型スポーツクラブの実現へ

オリンピック選手を輩出

さる7月30日、北京オリンピック2008に出場する2人のビーチバレー日本代表が、東京都文京区のＪリーグ事務局を訪れた。湘南ベルマーレのビーチバレーチームに所属する男子の白鳥勝浩と女子の楠原千秋。サッカー以外の競技では、Ｊクラブから初めて生まれた夏季オリンピック出場選手だ。「Ｊリーグの支援のおかげで競技に集中できた」という白鳥のコメントが、各メディアに掲載された。

「誰もが、レベルや興味に応じて、好きなスポーツを楽しめる環境づくり」を目指す「Ｊリーグ百年構想」。湘南ベルマーレは、Ｊリーグで戦うプロチームの運営と並び、この理念の具現化に向けても大きな力を注いでいる。オリンピック選手を輩出した前述のビーチバレーをはじめ、世界選手権U-23代表も所属するトライアスロン（水泳、自転車、陸上競技）、日本リーグ2部のソフトボール、そして全国リーグのＦリーグへ入会したフットサルの4競技が活動。こうしたトップチームだけでなく、それぞれの大会やクリニックの開催を通し、普及活動にも尽力している。

しかし、湘南ベルマーレの名を冠するものの、これらの競技はＮＰＯ（特定非営利活動）法人である「湘南ベルマーレスポーツクラブ」の管轄。サッカーのU-15以下の下部組織の活動も、このＮＰＯ法人の下で行われている。一方、サッカーのプロチームとU-18は、株式会社湘南ベルマーレによって運営されている。

トップチームの強化と地域密着活動。それぞれの組織の趣旨を明確にしようと、ＮＰＯ法人化が初めて検討されたのは1999年。その後、ビーチバレーチームの発足、地域における各種大会の開催や小学校への体育巡回授業などで実績を積み、2002年4月にＮＰＯ法人としての認証を受けた。

ビーチバレー、トライアスロンといった「海」にかかわる競技からの発足も、湘南海岸に面する市町などをホームタウンとする湘南ベルマーレにふさわしい。フットサルチームも、神奈川県南部を活動拠点としていたチームが前身。ソフトボールチームも、もともと盛んだった厚木市を中心に活動するなど、地域の特徴、実情に即しながら、欧州型の総合型スポーツクラブの実現を目指している。

ビーチバレーの日本代表、白鳥（左）と楠原　©湘南ベルマーレ

地域の交流が着実に進展

こうした地域貢献活動への注力は、1999年のクラブ存続の危機がきっかけだった。一部出資会社の撤退により、クラブ運営は新会社へ移行。時あたかも横浜マリノスと横浜フリューゲルスが統合した年でもあり、クラブの将来に暗雲がたちこめた。このシーズン、主力選手の多くがチームを離れた影響もあり、Ｊ1リーグ戦16位（最下位）でＪ2リーグ戦への降格を余儀なくされた。

遠藤 広報担当

「下部組織に属する選手の保護者の方々から『クラブはどうなってしまうんでしょうか』という質問を受け、コーチや強化担当者も『分かりません』としか答えられなかった。あれは二度としたくない経験」と当時を振り返るのは、現在は営業部所属で広報を担当する遠藤さちえさんだ。「地域に根差した活動を真剣に考えるようになったのは、まさにこの危機に際して」（遠藤さん）だった。

湘南ベルマーレが実施する健康づくり教室の参加者が、トライアスロンの日本選手権を応援。教室の講師を務めるのは、トライアスロンチームのコーチだ　©湘南ベルマーレ

だが、「寝ても覚めても不安だった」（同）経験が、「クラブは誰によって支えられているのか」という自問の機会となり、その後は試行錯誤を繰り返しながらも地域密着という芯がぶれることはなかった。ベルマーレのエンブレムの下、人の交流も活発となった。普段はプロチームを応援するサポーターが、他競技の応援に駆けつけ、スクールの教え子が「コーチ」の試合で声援を送る光景の話を聞くと、関係者の感動がこちらにも伝わってくる。ソフトボールも地域の応援や選手の所属企業の支援に力を得ている。クラブが中心となる地域の交流は、着実に進展しているといえるだろう。

遠藤さんはクラブに対する認知度にも、変化を感じ取っている。「以前は『選手や試合をテレビで見たよ』という感じだったが、最近は『イベントに参加した。選手と一緒に活動した』というのも増えてきた」。「何も分からず、無我夢中で始めた」（遠藤さん）活動の成果も地域に浸透しつつある。

株式会社とＮＰＯ法人。組織は別だが、スタッフはどちらの業務にもかかわり、多忙が推測される。しかし、「クラブが華やかといわれた時代に持っていなかったものを、今はたくさん手にしている。今のベルマーレが一番好きです」と表情を輝かせる遠藤さんに、地域密着への正しい道を進む湘南ベルマーレの充実ぶりがうかがえた。

（共同通信社　築地 良仁）

Report
リポート

2008Jリーグ U-12フェスティバル

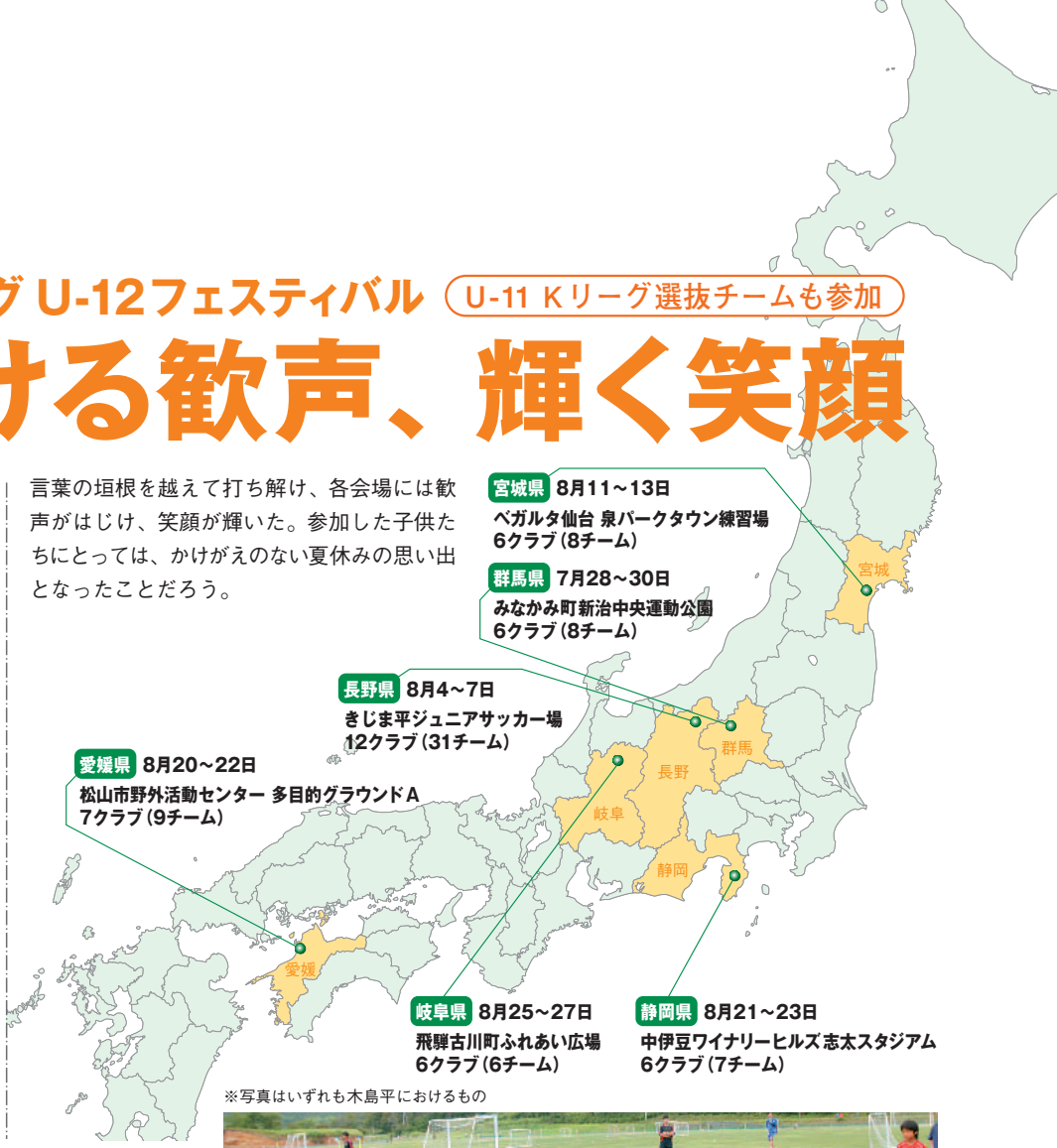
U-11 Kリーグ選抜チームも参加

はじける歓声、輝く笑顔

「2008Jリーグ U-12フェスティバル」が7月28日～8月27日の期間、宮城県、群馬県、長野県、静岡県、岐阜県、愛媛県の6会場に分かれて行われた。毎年、夏休みの恒例の行事として定着している同フェスティバルだが、今年はJOMO CUP 2008に出場したU-11 Kリーグ選抜チームや地域のトレセンチームなども合わせ、合計69チームが参加した。

実施されたプログラムは、補欠のない全員参加の8人制によるゲームや、異なるチームの選手が組んだ3人制のミニサッカーなど。SR（スペシャルレフェリー）も参加し、あらためてフェアプレーの大切さも学んだ。さらに、サッカーだけでなく、自然体験や地域文化体験、ASE（一人では解決できない課題を、メンバーの協力により解決する活動）、バーベキューなど、楽しみながら豊かな人間性、協調性をはぐくむための活動も行われた。

最初は緊張気味の子供たちも、プログラムをこなしていくうちに、ユニフォームのカラー、言葉の垣根を越えて打ち解け、各会場には歓声がはじけ、笑顔が輝いた。参加した子供たちにとっては、かけがえのない夏休みの思い出となったことだろう。



※写真はいずれも木島平におけるもの

木島平は12クラブ（31チーム）が参加した最大規模のフェスティバル

韓国のU-11 Kリーグ選抜チーム（赤）はJOMO CUP 2008に参加後、木島平へ

とうもろこし狩りも大収穫

バーベキューで国際交流

SRからも貴重な話をたくさん聞いた

3人制サッカーの賞品はカブトムシ

地域文化の体験プログラムでは、木島平村の「木島太鼓」を熱心に鑑賞

FAIR PLAY!

「Jリーグニュース」は100%再生紙を使用しています。